

『判断と崇高—カント美学  
のポリティクス—』

宮崎 裕助

専門書 知泉書館

5,775円

ご専門は、哲学と聞きました。今度出されたご著書は、なんだかとても難しそうに見えるのですが、タイトルには「判断と崇高」とあり、一見関係なさそうな二つの言葉が結びつけられているところがまず気になりました。いったいどんな本なのでしょうか。

この本は、私の博士論文に基づいているので、ちょっととっつきにくくみえるかもしれませんが、この本を貫く問いは、実はとてもシンプルです。判断するとはどういうことか、とりわけ、頼りになるような手引きやマニュアルが与えられていないときに、ひとはどのように判断すればよいのか、あるいは、こうした判断の問題をどのように考えたらよいのか、これが本書の問いです。

私たちは生きるなかで、まだ経験したことのないような未知の状況、想定外の場面に必ず遭遇します。そういうときでも、状況を判断し、どうするかを決断しなければならぬことが多々あります。既存の規則や指示に頼れないときに、暗闇のなかで手探りや試行錯誤しかできないときに、私たちは、どのように判断したらよいのか、という問いを本書は探究しているわけです。

**しかしそれがどうして「崇高」と関係するのでしょうか。**

いま言ったような判断の問いを、哲学史上、最も明確に打ち出したのがイマヌエル・カントの『判断力批判』という本でした。カントは、18世紀末ドイツの哲学者で、とても有名な哲学者なので名前ぐらいはご存知でしょう。カントの哲学は一般に批判哲学と呼ばれていて、『純粋理性批判』、『実践理性批判』、そして『判断力批判』という三つの書物からなります。『判断力批判』は、カントがみずからの批判哲学を完成するために著した最後の批判の書でした。それが判断力の問題にあてられていたのですね。

『判断力批判』の面白いところは、判断の問いが、美学の問題として追究されている点です。美学というのは、英語ではエステティクス(aesthetics)と言いますが、これは、感性(アイステーシス)の哲学、つまり、自然や芸術を美しいものや崇高なものとして受け取る感覚の根拠を探る学問のことです。カントにとって、判断の本質的な問題は、理屈や論理の領域で解決できるのではなく、感

性に訴えかけなければならない問題だったんですね。本書は、判断の問いに切り込むカント美学の中心原理を、カントの崇高論のうちに見出しました。そういうわけで、「判断と崇高」というタイトルになっています。

**判断の問いが、美学の問題になる、という点がまだいまいよく分からないんですが……。**

難しく考えることはないです。まったく別の例を出してみます。最近将棋の羽生善治の本をパラパラ読んでいたのですが、将棋の世界でもここ十数年は情報化が進んでいて、過去の何万局とある棋譜が完全に記録され、ネットなんかも簡単に検索できるようになっています。そういう状況では、独創的な新戦法が打ち出されても一晩で情報が行き渡り、次の日には対策が講じられ、その戦法は使えなくなってしまうそうです。

だからいまの将棋界は、情報戦という面がすごくあって、プロアマ問わずつねに勉強しておかなければすぐに負けてしまうという厳しい状況にあるわけです。面白いなと思ったのは、判断のための情報が増えれば増えるほど正しい判断ができるようになるかという点と必ずしもそうではない、ということを羽生が強調していた点です。

実は、勝負どころでは、プロでも、十手先の展開も読めないそうです。五里霧中のなかで一手一手決断しているのが実状であると。そのつど新しい局面のなかで、山ほどある情報のなかから、どれがいまこのときに必要な情報なのか、どの情報を選んで捨てるかといった肝心の判断については、どれだけ足跡や棋譜を暗記していても、当の情報はなにも教えてくれないんですね。

羽生は、そのときに必要な決断力とは端的に、直感の力であると、要するに、感性の問題なんだと言っています。ありていにいえば、勘であり、閃きやインスピレーションと呼ばれるものです。カントが提起した判断力の問題もまさにこのことであって、判断の核心で問われているのは、つねに感性であり、エスティクス(美学)なんですね。

勘とか閃きとか、こういう問題は、そもそも学問にならないことなんじゃないかと思われがちですが、まったくそうではない。論理だけで進むように思われる数学でも、証明の美しさやエレガントさみたいな美的側面はありますし、たとえば、中学校の幾何学の図形問題で、補助線が直感的に閃かないと解けない、といったように、感性の役割はつねに本質的な問題です。

こうした感性の働きは、そもそも近代哲学の祖であるカントからして明確に立てていた問題なんですね。というより、一般に人文学(ヒューマニティーズ)が、長い歴史の中で、教養や文化として培おうとしてきたのは、まさにこういう判断

方のことなのです。…… ちょっと話が大きくなってきましたが(苦笑)。

いえいえ(笑)。ともかく、この書物の問題意識はよく分かりました。では、本書のタイトルに関連してさらにお尋ねしますが、「カント美学のポリティクス」という副題がついています。「カント美学」はよいとして「ポリティクス」というのは、どのようにかかわってくるのでしょうか。

本書の後半が扱っているテーマですね。ポリティクス(politics)というのは「政治」や「政治学」のことですが、ポリスという語源や、思想や哲学の文脈でのより広い意味をほのめかすために、カタカナにしてあります。私の念頭にあるのは、ハンナ・アーレントという 20 世紀の思想家なのですが、その場合「政治」とは、ポリス(ギリシアの都市国家)の内と外とを分け、共同体の境界や敵味方の線引きを図ろうとするアルカイックな政治のことです。

アーレントは、カントの『判断力批判』が、たんに美や崇高を論じる美学の書であるだけでなく、政治の書であると主張しました。アーレントはまさにカントの判断力の概念のうちに、政治化の根本的な働きをみてとった。問題なのは「政治的判断力」であると。

カントにとって、美についての判断は、どこまでも個々人の主観的な経験に依存するものです。美の判断は、誰から教えられるわけでも理屈で分かるものでもなく、当人の孤独な判断に基づくものでなければならない。にもかかわらず、美の判断は、たんなる個人的な趣味や、たまたま偶然に起きた錯覚といったものにどまらず、広く万人に訴えかける普遍性を獲得できる、それこそが美の力なのだ、というのがカントの主張でした。

アーレントによれば、このような経験は、実は、民主主義的討議や市民的公共性の条件だと言うのですね。というのも、美についての判断が、主観的にもかかわらず普遍的に共有されるべきものだとすれば、この判断は、他者との合意(コンセンサス)を必要としていることになるからです。美の判断そのものは孤独になされるほかないのですが、この判断は、他者と実際に話し合い共有されるなかで、そもそも人々が分かち持っているはずの共通感覚(コモンセンス)を明らかにし育てていくというわけです。このように、孤独に下された個々人の判断を、公共化し普遍化してゆくプロセスにこそ、アーレントは、政治の根本原理をみたわけです。

**なるほど、人々の美的感覚や感受性が、共同体の形成や政治的な活動の基礎として働いているという話は分かる気がします。**

ただ、本書はアーレントの議論にそのまま賛成しているわけではありません。

アーレントは、カントに着眼しながら、美的なものが政治に及ぼす負の側面を十分に見ていない。この夏に選挙がありました。現代では、メディアが扇情的に「政治」を演出することで、人々の判断を狂わせるというような局面は非常に多いんじゃないでしょうか。結局は「なんとなく」気に入らないとか期待がもてそうだからで票を投じている人は少なくないでしょう。

今日の世論は、驚くほどコロコロ変化します。政治家たちもメディアが市民感覚に訴える力を効果的に利用して人々の支持を得ようとするわけで、ここには、ドイツの批評家ベンヤミンがファシズムのなかに指摘した「政治の美学化」に通じる危険が潜んでいます。実際、政治において「崇高」を演出しようとする、だいたいほろくなことにならないわけです。ヒトラーの演説はその典型ですね。

### **とすると、カントの言う崇高も政治的に危険なんじゃないか。**

そうとはかぎらない、むしろその危険を批判しうるこそカントの崇高論の可能性なのだ、というのが本書の主張です。アーレントは、カントから「美の政治」を取り出して民主主義の基礎としましたが、「崇高の政治」の危険性を十分認識していなかったように思います。本書は、そうしたアーレントの問題をどのように克服するのか、崇高の政治に対してどのように抵抗するのか、リオタールやデリダといった現代フランスの哲学者たちの判断論や決断論の成果を活かしながら、カントの崇高論に新しい光を当てることを試んでいます。その結果、本書がカントの崇高概念のうちに新たに見出しているのは、もはや美でも崇高ですらもない「パラサブライム」と呼びうるような経験です。

### **パラサブライム？ですか。**

崇高なもの(サブライム)に取り憑きながらも、その傍らに(パラ)とどまり、そこからはみ出し続けるもの。本書はとくにそれをカントが「吐き気」と名指した感情を通して追究しています。ここで肝心なのは「吐き気」の感情そのものではなく、それが、いっそう否定的でとらえがたく、えもいわれぬ感情だということです。つまり問題になるのは、それに名前をつけたり概念を与えてしまったりしたとたんそのことによってみずからを否定し無化してしまうような微細な感情の動きなのです。どこまでも予測できず理解不可能なままにとどまる感情というか。感情にはそういう本質的な秘密があります。

### **ふーむ。しかし、そんな感情に基づいた「パラサブライムの政治」というものは考えられるのでしょうか。**

本書ではそういう言い方をしませんでした。そう言えるのであれば、重要なのは、私たちひとりひとりの感情を、共同体の統合の原理として昇華することではなく、逆にそうした美的政治に抵抗するような、どこまでも特異な経験として発

見直しことです。どんなに個人的で些細な、ほとんど秘密のままにとどまっている感情であろうと、そこにはそうしたものとして尊重されるべき力、感情として判断を促し決定する力があります。私たちは日常的にそういう感情に見舞われながら、知らず知らずのうちにそれを押し殺してしまっているんじゃないでしょうか。それを救い出し解放することに政治的な射程があるのです。新たな「情動の民主主義」の到来とでも言えるかもしれません。これこそ、本書が最終的に明らかにしようとしたことです。

**また壮大な話になってきましたね。**

そうですね(苦笑)。もちろん、まだまだ積み残した課題は多いのですが、少なくとも本書は、カントに遡る強固な哲学的伝統のただなかで、ひとつの突破口をはっきりと指し示すことはできたのではないかと思います。

